

言葉にしなくても…

横浜Y M C A学院専門学校 郭 嘉哲（台湾）

「すみません、写真を撮っていただけませんか。」

突然声を掛けられた。横浜山手の定番の散歩道を歩いていた時のことだ。正月の横浜は寒かったので、観光地とはいえ、異人館には客があまりいなかった。海の近くなので寒い風が強く吹いていて、私と同じような旅行者はほかには見かけなかった。

「はい、いいですよ。」

一人で観光している者同士はもちろん手伝い合うべきだろうと思いつつ、手を伸ばしカメラを受け取った。

「古いカメラですね。」

35ミリのフィルムカメラは今ではもうあまり使われていない。きっと長い間大切に使ってきたのだろう。目の前の旅行者は六十歳くらいのおじさんで、顔は冬なのに日焼けしていて、素朴そうな人だった。私はカメラを構え、写真を撮る準備をした。

「あ、ちょっと待ってください。」

おじさんは言いながら、手をポケットの中に入れ、何かを探している。

「あつたー！」

おじさんは一枚の写真を取り、胸のあたりに持っていった。五十代くらいの女性の白黒の写真だった。

「これは私の妻だった人だ。せっかく横浜に来たので、せめて一緒に写真を撮りたい…」そのような深い感情が言葉で言わなくても私には感じられた。

写真を撮った後、私は日本人の感情表現について考えていた。十年前、アメリカに留学し、一年半住んでいたことがあり、いろいろな国の友達と付き合う機会に恵まれた。その時、感情表現というのは国によって違うことが多いと感じた。例えば西洋人は人前で「I LOVE YOU」という言葉をよく使っていたし、夫婦や恋人は人前で抱きしめ合ったりキスをしたりすることも珍しくない。西洋人は感情や考え方を直接的に表すことが多いと思った。そして「くしてほしい」という気持ちが強く感じられ、感情表現を人目にも気にせず使っていた。まるで自分の気持ちを周りの人にアピールするように。西洋人は何が言いたいのか、何をしたいのかが分かりやすいと思った。

一方、そこでの日本人の友達は「感情」どころか「欲しい、したい」という気持ちをあまり言わないと感じていた。例えばチームワークで何かする時に、西洋人は「Let's Do It!」とはっきり提案したが、日本人は「これも悪くないんじゃない？」と曖昧な返事をした。「結論は何？」その時の私は相手が言いたいことをあまり「読めなかった」。しかし、日本人同士はみな言わなくても意味をよく理解しているようだった。

日本に来る前に「日本人は丁寧だが感情をあまり表さない」と言われてきた。日本人は「空気が読める」という「能力」を持っているそうだが、私にとって空気が感情を「読む」ことはとても難しい。丁寧な言葉と親切な笑顔の裏で何を考えているのかほとんどわからない。空気を「読む」なんてことは、ほぼ不可能だ。好き嫌いもほとんど言わず「曖昧」「感情なし」ということが多い。だからなおさら、あのおじさんとの出会いは私にとって大変貴重な経験だった。

「どうして」なくなった奥さんの写真を持ち旅行しているのか。「ほかにもどこかに行ったのだろうか」疑問が心の中に次々と浮かんできた。答えの出ない疑問がたくさんあったが、目の前のおじさんを見た瞬間、少なくとも一つのことがかかった。おじさんはきつと今でも奥さんのことを忘れないようにし、更に二人の新たな思い出を作ろうとしているのだろう。こんな行動もある意味では、日本人の感情表現なのではないか。

一般的に日本人は「愛しているよ」とは言わないが、心の中では相手のことを考え、一生懸命守る。このように言葉には出さない愛情・感情が実は一番強いものなのではないだろうか。

言葉・感情を表現する方法は国によって異なるものだ。しかし、私は異国に来てても自分の国の習慣と考え方もしばらく変えられないので、慣れないことも多い。ところが、見えなくても物事の本質は同じなのではないかとおじさんとの出会いによって、はっと気づかされた。異国の人、文化と交流する時に一見違うと思われることの中にも本質的には同じことがある。これを探すことによつて、お互いがより深く理解できるのではないだろうか。

寒い風が吹き続けていたが、おじさんの後ろ姿を見送る私の胸は、少し暖かくなったような気がした。

